
Sleeping Doll's Room

海の子マンボ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sleeping Doll's Room

【Nコード】

N1352Q

【作者名】

海の子マンボ

【あらすじ】

ある事件をきっかけにニートになってしまった椿。その事件の真相を探りながらも、行方知れずとなった妹を探索するのだが…。

『君は、ずっと僕のものだったんだよ、知ってた？』謎の銀髪青年VS『悪いけど、私、ニートだからあんたとは結婚無理よ。』元・

警視庁組織犯罪対策部、椿

Casts

たかさきつばき
高崎椿

25歳ニート。何ヶ月前は、警察庁、特殊犯罪対策部に所属。情熱的な思いとは裏腹に、そうした感情を表に出すことはない。

たかさきあんず
高崎杏

22歳会社員。美人なことを鼻にかけており、頭脳では勝てない優秀な姉椿のことを見下している。突如姿を消す。

みずさわとう
水沢灯

26歳椿の同僚。現在、刑事部捜査第一課に特殊犯捜査係に所属。椿とは同僚で、一時期は、同じ研修訓練を受けていた。

きたはらはじめ
北原一

52歳椿の上司。事件により殉職した。

ひらやま
寿山

28歳杏の恋人。テトラ・エンターテイメント会社の会社員。妻子持ちであることを杏に隠している。

謎の青年

年齢不詳。銀髪にブルーの眼。自分の姿を自由に若返らせたり、年老いさせることができる。

「んっ。朝か…。」

ニートの朝は、早い。朝日が昇ったと同時に、1日の終わりを迎えるのだ。

プルルルルツ

プルルルルツ

誰だ。今から、眠ろうとする私を起こす輩は……。

一体誰だ？

いつか、かつて一度母に起こされたことがあった。それは父が死んだ時で、あの時の私は、電話にでることもせず、惰眠を貪り、親の死に目に会おうともしなかった親不孝な娘であった。なんてことは嘘で、実は両親共に健全だったりして。ごめんなさいねー。嘘なんです、はい、嘘っぱちなんです。まだ鳴り続けている電話に向かって語りかけているつもりだったのに、全く取り合ってはくれないよ、Oh, No! 分かりました分かりました。

受話器取ればいいんでしょ!?

内なる気持ちを抑えることなく、私は、いつものように内気な自分の仮面を被るとすぐさま受話器を取った。

「はい、もしもしー。高崎です。」

「あつ、母さんよ。あんた杏子がそっちに行ってるなんてことは、まさか、無いわよねー。」

エリート街道まっしぐらだった姉がニートになってるっていうのに、誰が会いに来るよ？

かつての同僚とも縁を切った私の元には、誰も来やしないわよ! そんなことを思いながらも、相変わらずな内気な私は、そんなことを言えるはずもなく、か細いには程遠い、ぼそぼそした話し方で応答する。

「いえ、来ていませんが…。」

「そうなの。相変わらず、あんたって暗いのねー。だから、首になっただんじやないの。あーもったいない。あんな職につける子なんてそんなにいないのにね…。あっそうそう、脱線しちゃったわ。あの子、また旅行にでも行ったのかしら。いやあね、実は、彼氏の寿山さんにも連絡いれてないみたいでね。どこに行ったか知らないわよね。」

私に聞いても、一週間も外の光を浴びてないのに、何を語れというのだ。しゃべったのはネットゲの友人とだけだぞ。

「知りません。じゃ…」

と言いながら、電話を切ろうと思いきった私に、何を思ったのか、母はこんなことをのたもつた。

「今のあなたに送っている生活費で探偵雇おうかしら。」

さすがの私も、この言葉にはカチンときた。

「勝手に雇えば!!」

バンッ

受話器を叩きつけた私の眼から汗がでてきた。こんな物知らない。

私は、もう二度と人助けなどしないのだ。

がしゃんっ

電話機をスライドさせるようにして床へ殴り飛ばし、放り出された電話機に気を止めることなく、私は、寢床に一目散に駆けだした。布団を思いつきりめくり上げ、体を滑り込ませて頭からかぶった。

「誰も、仕事辞めたくてやめたわけじゃないわよ。」

この仕事を辞める3年前、私は警察庁という組織に入ることになった。憧れだった警察庁の中でも、組織犯罪対策部にやっとなれた私が、今の自分のみじめな姿を描き出そうとしても無理であっただろう。人を死なせてしまった。そんな私が、社会的に抹殺されなかっただけでも良しとしてはくれないのだろうか。もう二度と、日の光の元を歩いて生きてはいけないのだ。周りにいて私をサポートしてくれた上司も、同僚も、被害者も、皆帰らぬ人となってしまった。

唯一残ったのは、目の前に聳え立つ社会的権威を背負った強大な要塞の城……。つぶされる前に、逃げなければ私がきつとやられていただろう。

毛布の隙間から覗いたカーテン。その隙間からのぞく光は、もうけっして私を後押ししてはくれないのだろう。

「破滅、そう、私の家族にそれが訪れなかっただけでも良かった。」

数ヶ月前に起きた東京駅構内による同時爆破テロ、電車ジャックは、多くの死者を出した。私は、唯一腕に抱いたままの赤子と、自分の身一つを守って電車から脱出した。その直後爆発した電車は、海上につきつぎと吸い込まれるようにして吞まれていってしまった。他の仲間や乗客を救うことなく、一気に敵の作戦の変更がなされたためらしい。たまたま乗り合わせていた目の前で人質の乗客が殺されていくのである。私たちは、何の手出しもできぬまま、その光景を見つめるしかなかった。犯人側に押さえつけられたまま、その場にいた仲間たちには、苦悶の表情が浮かんでいた。何も手出しができないのが苦痛は、目の前で罪のない人々がむぎむぎと殺されていく度に山積していく。なんとか打開策をと神経をとがらせて考えているのが分かったが、私には、正直そうした考えが浮かばなかった。下手に動けば、人質がもっと殺されかねない。

『身を隠さなくては……。』

そう……。あの時にはっきりと自分の耳元で低音の声が聞こえたのである。私は、自分の耳を疑った。その瞬間、私は、機内のトイレの中にいた。奇妙なことにその手の中には、銀髪の4、5才の男の子がこちらを見上げて、にやりと笑いかけてきていたのだった。その笑みは、純粋な子どもの笑みであるはずだが、私には、正直気味の悪い笑顔に見えてゾツとした。

まるで、死神に成長していく小さな子どものような気味悪さを感じたのである。いや、悪魔か……？

そして、その子から眼を離せないでいた時、外から大きな爆発音が何発も響き渡り、車内が大きく傾き揺れた。金属の激しくこすれる

音と、人々の悲鳴が入り乱れるのを耳にしながら、私は、激しい震動の中で得体のしれない子どもを守ろうと胸の内に抱き締めた。正直座り込んでいてもこの衝撃には、どうしようもなく、先ほどもから続いていた爆発とは比較にならないくらいの爆音が響いた時には、一瞬頭を便器に強打しかけた。その時だったと思う。私が温かな光に包まれたのは……。そこから、何が起こったのか、私には到底理解できなかった。布団をかぶったまま、あの時の光景を思い浮かべる。天井にまるで機能の事のように、あの時の情景が浮かび上がる。

ただ、ただ見つめているしかなかった。何故、自分がこの海原の中に浮かんでいるのか。どうして、さっきまで私が乗車していたはずの電車が、爆発、炎上しながら海の中へ続く線路もないのに進んでいくのか分からなかった。

私は、ぶかぶかと浮いたまま、唾然としながら目の前の光景を見つめていた。誰も、知らない。知らぬ間に、瞳から、ぷっくりと涙が後から後から蛇口を閉め忘れた時のように止まらなかった。はじめは、そんなことに気づきもしなかった私に、腕の中の男の子は、茫然としている私の頬に伝う涙の滴を丁寧に舐めとっていた。

『美味しい。やっと見つけた。君は、ずっと僕のものだよ。分かっている？』

可愛らしい天使のような男の子は、その澄んだブルーの瞳に、私を写しだし否応なく目の前で起きている出来事から遮断した。それを最後に私の記憶はぶつりと途切れた。

眼が覚めた時には、私は病室にいた。眼を開けると同時に見えた母の顔を確認しながら、きっと助かっているはずの彼らの事を聞く。『何言ってるのかしら、この子は……？そんな名前の人間聞いたこともないわよ。それより、職場で貧血起こしてぶっ倒れて、丸々2日間も寝てるなんて、不摂生してるんじゃないでしょうね。もう、いいかげんにしなさいよ。母さん恥ずかしいわ。』

その言葉を聞いた時に、目の前の母がおかしいのだと思っていた。でも、そうではないことが、テレビと職場の中では出来上がってい

た。事件など、1つも起きてはいないのだと…。最初から、物事は起きていない。沈黙を守れと重圧をかけられているみたいだった。上司の机もなくなっているということなら、きっと同僚の机もないのだろう。それに気付いていた私は、周りの人たちが何事もなかったように、仕事をしている姿に驚いた。不思議に思いながら、探りを入れて周りにいた人たちに聞いても、上司や、同僚のことを誰も覚えていた人はいなかったのである。

その後、私は、辞表を出した。誰も生きていない、守れなかった職場にいる意味などない。生きていく価値などないのかもしれない。むしろ、私は、この社会の中で、いつでも締められる鎖を嵌められているようだった。首を無意識に触っても、何か付いているわけでもない。だが、私には安堵のため息をつける余裕はなかった。

「どうして、何故なの。」

子どものような思考回路の運動にうんざりする。もっと働けよ！私の頭！！！！

「それに、あの子…。宇宙人なのかしら。それとも、ドラえもん？ねえ、あなたは誰？」

あの時確かに私の腕の中にいたのは、4，5歳の男の子だったはずなのに、私の手には赤子が抱かれていたという。もちろん、髪の色は…銀色の…。

全てが、何かによって歪められている。あったことがなかったことになんてなる世界、どうかしてる。

「絶対、私が真相を掴んでみせるわ。……その前に、睡眠っと。」

そう言いながら、私は、また毛布を頭の上に引き上げたのだった。

『暇になったら来いよ。』

とまで言ってやったのに、あいつはなぜ来ない。それほどまでにしよげかえっているのか。まあ、あんなことを起こして、辞職届を出すなど、ただで済むはずないことは分かっているが、何故こっちから電話をかけているのにでないのか。

ガンッ

喫煙ルームで煙草を吸いながら眉間に寄せ、いらいらしたままの水沢灯は、灰皿の足を蹴散らした。

「くそっ。死んでねーよな？あいつ、また、貧血でも起こしたのか？」

つぶやいた言葉に何の安心感ももたらしめてくれる情報などなく、彼はため息とともに紫煙を吐き出した。ポケットに両手をつっ込み、そのまま指先に当たった携帯を取り出す。彼女のメールアドレスを見つめたまま、パタリと携帯を閉じた。そのまま、喫煙ルームを出た彼に、いつもの取り巻き連中の数人が近づいてきた。

「水沢さ〜ん。今夜部長のおごりで、そのまま呑み会らしいんですが、いきますよね〜？」

化粧の濃い彼女たちは、ここをどこだと思っているのだろうか。まとわりつく彼女たちに絶対零度の眼差しを向けたまま彼は言い放った。

「私事の事件のため、今回は欠席させていただきます。失礼。」

その声と瞳は、彼女たちに間違った妄想世界を抱かせるには十分だった。もちろん、先を急ぐ彼にその言葉は届いてはいない。

「いや〜ん。水沢さんいつにも増して、あの何でも切り去っていくような殺気がかっこいいわ〜。惚れる〜。」

少し変わった取り巻き達は、水沢を見送りながらも、うっとり

した表情を張り付けたまま夢心地のような感覚を味わっていた。

「全く。あいつら一体警察を何だと思っっているんだ。まあいい。ああいった奴らは、腐るほどいる。いちいちかまってもいられないしな。」

一人乗りこんだエレベータで独り言をダダ漏れにさせながら、彼は速く一階に到着しないか、しきりに確認していた。地下についた彼は、駐車場に停車させている自分の車に乗り込み、エンジンをかけた。そのまま、発進させていた。

寝苦しい。一時の睡眠を貪る椿に、重くのしかかる見えない何か。それは暗闇の中にいるためか全く見えてこない。その正体を知りたいと思うのに、体の自由が何かによって拘束されているようであった。

「はっ、離せっ。くそ、なんで外れない!!!」

真っ暗闇の中でもがく椿の元にくすくすという声が聞こえてくる。

「誰だ…。」

「僕だよ。ツバキ。忘れたのかい。」

耳になじむ声、だが、彼女はそれを望んでいたわけではない。

「おまえ、あの時の…。」

「そう、やつと思ひ出した？」

暗かったはずの場所にぼんやりと銀髪が浮かび上がる。ぼんやりとした輪郭がうごめき、それはまるで無数にうごめく蛇のようでもあった。

「何しに来た。」

おそらく、睨みつけられているであろうと分かった銀髪の何者かは、少し笑いを含ませながら彼女に、語りかける。

「心外だな。そんなに邪見に扱わなくても。せっかくい情報を持ってきてあげたのに…。」

「何？」

「聞いてくれる前に、君に見せたいものがあるんだ。どうする？」

「お前と関わっている時間はない」

「これから、その一部を君に見せてあげるよ。そうしたら、君は、うんっと言って首を縦に振らざるを得ない状況になる。絶対にだ。」

一体、この銀髪が何のようがあって彼女の夢にまで出てるのか。

椿は、好奇心が勝ってしまったのか、彼の方に顔を向けてしまった。

「簡単だ。さあ、僕の目を見て。」

言われたまま、椿は彼の瞳を見つめた。深いようで、鮮やかな寶石のような海色の瞳。そこから紡ぎだされる新たな出来事が、これからの彼女の運命を変えようとは思いつかなかった。

2（後書き）

こんばんは。こんにちは。

少ししか進みませんが、更新しました。

読んでいただければ幸いです。

いろいろと自己満足な作品になりそうですが、それでも良いと言っていただけの読者さまに読んでいただければ幸いです。

次回の更新は気長に待っていただければありがたいです。

平成23年2月18日

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1352q/>

Sleeping Doll's Room

2011年2月18日00時40分発行